遺老物語



遺老物語

目録







此書文禄の比より享保の間古老の雑談といふ書
と数年の中一冊を得てあり予写し置しを大成し
て遺老物語と題号す

享保十八年癸丑　朝倉日下部景衡識

一いつれの時か信長公御陣の場にて一瀬久三郎御甲をおとし
居たるに織田の家老林佐渡守一瀬に向て御甲に向や
なとされ候へともいひけり先誤りたりと詫てあるとさん
ときに信長公仰けるは此歎は一揆の事なれは何とやう
来らんもしれす其時に至り候へとありしかは一瀬
面目とすへきてとおくもしれすと案のことく此度は
木なけれは敵をそみえけれとてみなすゝみ戦ひて終に大利
を得給ひけり一瀬一番に手を合せる名をして御感あり
該り其後に一瀬をめされ今般のふるまいなと仰られは
候きなりて面目とすへきよと申す所に恥しけに
感状褒美なとありし林をとかめられは挨拶をせされし
一ある時信長公誰にてもと気をれと仰けるに近習の小姓一人

氣て御とよ川かやうしと称するはよかりおつ又字のごとく
にめされしハ外のに姓氣わり志ふこれも志ろしありていふ
ずと御られをゆかり　出川又郎ありて誰氣れとあるし
にまさ事の人氣に志らふく　ありてこれと変ふくて
殊ありしに堂の側にちりありしとそうてよかり出しを
猪三郎と御ありて御らるも然て人ゝ忠と氣ともふかた
と以てもよしとする武島といつてかゝるとひくこと
時のしかあひ合戦此男之其ち为ら只その退れ志をし
しことめてかひしとかり

一　これとい尤もの陣の時よりやそのなとなれより修せて
の侍ふ情実ず　打まけてる由りまぞ　もられて流さき
ありさ由ず　称さり　その明けの日すゝきやふかられぬ

打死す庭しとをきて定めて紙子羽織のうしろに黒き餅
とかたつき大きなるさし板と求めて鋸に刻腰さし由
ずして戦ひと侍川なとふく歓にちら付てさらひに
白眼あひしかとに九の大ふ扇ともち右の手ふ刀とぬきて
大音とあけ鬼宗氣り小袖とひかれさとい小被らうらひ
てとどりありあ陳ありみすふあまれて志ども只由
志て務ありれと之合てさあかしれくと一先にかゝふ
ふつきて七八人ありとかけわるせとも川と一度にかゝるも
てつきら川しられむ内方大利とけてけりつきて
かけへし七八人の者いひわそうしまるとぞけるけるに

一　織三七度此侍二宮千ち氏これと情実ず打かけて馬
ありとをされてせんかなく三七どの御あへまゐり

一 わするなかりけるによりて情愛ともに此氏仕合よき
成るおもひのまゝにふるまひけれども馬も見足こと
侍しらバ此上をかれと打果すともまんずるべし
打しそめしなりけれとも御用にたちしハんつるものとけ
時に打果ししんといふさふらいハ此上の御意趣
そしハ御検使とうけて切腹仕らずと申されけり
し不快なりし義とすにしハありとのこしまいて黄金
武技名を馬まで下し給ふ明なれ合戦に組討して
名をあげ拵へより 三七度なり名を色とあとされしと
一 明智日向守逆心とおもひしハ時五月廿四日愛宕山
にて打續の歌ありし 光秀の發句
時も今あめか下しる五月かなとありしに紹巴執筆を

と吟じけれど紹巴執筆の才とみえやりて此句神なし
あかかなるとあるべきよしなれバ光秀志しぬ来と
いふ志やりあ坊主あといひけるに紹巴かさ称てさふら
るとあそをされしに給しかふべしと會釋して執
筆れうことりやりけれどあめか下なる五月かそ此
ける脇句ハ愛宕坊 水上増る庭の夏山 并三紹巴
花落る池のながれをせきとめてとあり 太閤記
みゑしうとかきゐふ来しとあるなふあるかひと
これをひしかどらりける 書ぬ
一 丹後光秀家老の明智弥平次とよび丹波の城の大
守にていひしハ信長に恨とかしこき上りし又終にも
我み雖なきおよびぬと見えゆるべき此上も信長城

うしなひしかハ天下をまもる臣しとおもひぬ之いふ
やとおもひしとありけれハ弥平次承りて此旨のよしいさと
ありぬへしさりなれとも御心あらハおかしかせむしそあとの
御遺恨となるへきの上ニ又都をきき丹波のくにハ
副て坂本まてお預なさるゝ事ハ己に此恩そ冥
加にかなひかたし不ならにすの恨とおもひすてさせ
給ひて此逆心おもひとゝまり給ひてつき給らん事
疑なし君とすまし臣とし綱と諫して諫れ
も光秀臣ありておもしろしくなしして又申なへし
其外も分別ある臣しとて其日ハ臣とねそのうち溝
尾藤之助 斎藤内蔵助 明智次右衛門 藤田伝吾四人の家
老をめしあつめて其よしをいひきかし事いひけれ

かれらか諫止ひるすをも又弥平次か申さし取よかそ
ほその時光秀とにしとなるさもりてさしむ
みなか此ことをぬかり極まへしと納して其そのうち
六月朔日の日弥平次を始しとを皆いひける年
寄ともそれもひそかに談合をしけれ共外のやせし
取にすこしとなかそきりし皆そもひとしきりぬ
それ由心はかりらしとひかり弥平次此由とゆて
いふる此旬時分なき所分別か明智一人此口をいふか
みなとゝめかるへし四人の者の日ハとゝめさせ給ふと
めさるへしと明智秀満人各信長公を恨なるを
くらふ彼四人かうちかまへしと御殿と恨申そ
おもはらん時天罰のかれまする所なきへくれハ此上

は是非ともあそばれ候とあれば御わびのかなはれんや
志かるべし明智と讒されなば一大事なるべしとあ
らかじめにとせば其時すこしゆきあたりなれば氣色も
御後忘却の御ふるまひ致候 弥平次何心なくすゝめ
られども御れも氣をつけられて さていかゞなる
ことぞと志かるべきとおもひしよさうしも老臣とめされて
只今京都より飛脚到来 西国、筑前守殿きびしくおはれ
候より其方急ぎ出張し御下知あり 摂津
は勿論川を越て渡るべし 秘の相手なり 加茂
川へ勝の粮をあつめて集り出へと御定められ候へとて
明日二日此方明智は川を越して本能寺と二條とを
取へ軍勢を催しかけて路次に信長公城へ向ふ

御腹めさせられし後当世に志れぬ光秀京の掟あら
ましく置て安土をもむきあちの掟して京を
乃ありし時弥平次ともひて信長此御天守なれば
其方はさしおきて金銀にも心の掟油断なく仕れ
之といひしに弥平次此ものの極なる事とて
我が鼻とゆびさして金奉行をも事をさられしと
弥天命尽るなされなと腹立ちひられば筆りれ
氣色なく弥平次とは安土にとめられたり 案の
ごとく明智も山崎にて討れたり 弥平次は安土を
でおとされ坂本の城にいりてそれぞれ切て死し
さり此談合の明智信長記にとみえねどよくしれる
一 人の此いひしまゝにここに志るしぬ

一 蒲生氏郷の病にふしたまひしに利休まゐりたまひけり
此人茶の湯の師なりし故殊更に見舞へまいりて
対面ありて利休病のありさまを見て我煩ひを語
出し給へハ事つきハ御身をはかり文武の二道の達
人なれば日本において一人二人の御大名なれば
そへつけこれをつけ大切なる事と思ひ
外なるべからず御保養たるべき所におそれ油断
あるまじきといひしかバ氏郷
かぎりあれば吹かねど花はちる物を心みじかき春の山風
とあり 利休涙をながし辞世の事なるかなとて
てまへしハ物をといひ涙しりてさやうそハいへども
いひながら涙をおさへて

ぬると見えて陸には亀[illegible]雪には折れぬ梅柳の枝
といひて後物語一つ二つしてそ帰りけり

一 立川義之戦場にて何某とやらと組んで先手の首
うちとらんとす所を見て急ぎ飛来りしに見るや戦のまぎ
れになかなか合ひて首をとりけり鐙といふまで首
一つ取て帰り見参にへて後にいひしかど義之大に怒り[illegible]
我と見るが故にいつまでも返すまじとてその身の
働我この忠の不如もなく軍法にまかせてまけとたつる
ぬすびとあるに彼使の者すぐれし詞そへ涙しうて
ておふさまに人にむかひ小身ながらは取降の
訴なり
めるもやすく身にしみておもひけるもまことにかなしきかたみの
わかれ

とありけれも義之伝ひりかひてなかといふことあらしに
近習の人かくとも申し承えしかし 弁乗て気色あし
かさとしらざる仕形なれども急なりけりのぞみて寄
特に家隆の歌をおもひ出せしより名誉ありとぞゆる
されけり昔の人ちかく覺えしきるものありけるやうに
附によるべきなりし一振にも定めしとぞ人とあり
しこ

一 丹波の三ねの家安宅冬康常に歌をすきしへや
ありける時すきもしる芸の一むかしといひて白き冬康の
つかひしとて楽しみられしかりかとものゆゑとて文
筆事は冬康これを拔き見しふ度ふある人とあや
しみて何なりとやといひてそのいふへかせも

沼水のあさまかつきかり暗となりてといひてのち某氏
弟實休討死すと告来りけるといひてすなはち敵とたて
かひ名誉のあるなりけるとぞ

一 信長公の家に弓すきくの的とて射るにあたらばといふ
てすみきありしと信長公見きわずしをとりとさらなりて
えんなりしよの人をあつまるとき二のよれはあたるを
あきらかにて日ごとぬきは 信長的場より持すてそ
入れいひしと見なりとはいちらに持ちなと仰られけ
りその後一揆蜂起せりとて皆々をむひしに
彼弓をもち人 信長の馬にさられなをみてさし伝え
りつめ敵を射るに大きなるあてえ矢をなしみなこれ
さかふかりけると思ひしらぞくなるこひなりける 斜なれ

能ある鷹ハ爪をかくすといへるあり　先度の詢とハ
かゝる時と思ひてあてさせらるゝなるへしと
感し仰られて褒美の物給ハる㕝を時ニよりて
それ程多かる座なれと人の氣ハかハり　得しむ座さる
そやと弓よく志れる人此ひとしてそれ時かの弓射
人ハ名を世にかゝやかしけれとそ

一細川三斎者しき人四五人うちよりて茶を飲し
時水こほしに下る時ハ茶道坊主水をこほさんとそ
座をたゝむとせしに其のまゝ茶をとらせてよしありしに
まつき座ゆかけ者ハすこし志りそきてその水
こほしをかゝさむけて水を飲ミ身をそらし懐紙ニて
とりかへし口をふと拭てたしなとりて又茶をとらせ

たりけるといひしよし世に後に門出の語しとそ
ことに織縛ある座さるゝ其器ニ語られるれと
のかゝりしと世にいけると

一青木民部少輔十八歳の時の戦ニ見る敗れしあり
ふし勝る勝をかうけよ末をそてかへすまきそかゝみ
さらんヤハ座しる座しと下知ありけれと
皆人下知をしるに落九之と同じ場にと見合てあり
合わしかとに勝ニ勝ことを思ひなしとそ

一ある時古田大膳青木民部少輔ニむかひ此度ハ戦ニ
の高柄とうちあひしとく其時の様子かたりなく
しかしてみせといひけれハ高柄といひしものは
大剛大力のものにて我ニ至るとかゝるへきものにあり

それゆへの仕合にて家柄を願ひくらべなどしける
ゆきかかりてうちしたがはぬ乃様子もなかりしが
しかるところへられけるうちにかぎりなりぬるや
つゐに大膳その外の人みな滅しけるとぞ
一 織田内府へ米納万兵衛といひし人新参の時あるひと
たのめて志ある人にならひて士庭の名三つの不審侍り
ま兵衛殿まんゑ様かまんゑゑん殿志うとうけ給はり
うしなすといひける其のとき万兵衛申けるハ不審にし
ようは餘慕なりしなる儀にそくらしかはれ
その人此腹中に虚実あれどなり腹空虚の時ましハ
きらていふ息きめあるましられハ万兵衛とのつけし
又腹中充實して酒氣たゝし盛なるん時ハまんゑゑんと
きほらるゝ御しその名ハ生駒万兵衛と申すといひ
ゐりかのとひし人こ又いふ御きゝ詞なりしとさらず
志て味ある言葉と皆人いひける
一 小田原陣の時薙山の構とかこみし時森右近殿みそ
の人にとふとあつかひて行たるとつけられしに
あるけのかいひ出しけむやうて城中よりうち出ぬ
ようふなり出る者旗本へつめそて一手ふせりて戦ふ
御しかれしかどに我もしあまりそて手ぬて引ける
むその中に若尾治平次といふ鉄炮打二十人の足軽
たる中に氣しける某中にあるうんにハ此場なとさる御
これらし下知にたゝんかれハ罷あるべしといひし
など耳みも出ずなれて陣中時めきしまれなれ

七人まてありける鳩砲はこうそとちさる色つらん献
来ればみだりに下知すべきその時鉄炮一つうちてその
後某一書に鉄合せんずるとし跡くるしとそりて
居けるにしろより小屋にありてそれに居けるに
ち誰そといふ者尾弥平これにありと跡すへしとおもひ
跡もこれへといひて出入りみまで太京といひあつく
名字をはわすれたれとも志るしすでその時太京いはく
なにとはなしくて引志りてさましつらぬに某と人集
引かれとあまりにん許なけれはゆり来りてみるに甚
方かゝりえいかやといふ弥平次ゆきて名まさるといふす
と志らは答へあらてめさめきて引志りそらくといへと
某か方へはなにれ使をおしまして鉄炮なと聞さらん

ありすの實否と定まらめれしくてちさらへきまある
称もそのよし是跡も下知したまひしとてありけるのとも
以て大さ引のきて跡に七人として跡をきれとし献上
来さらんそれはせめてわかれらに一うちうてせそこれ以
一書に跡を仕るべし某をも跡つきされんとおもひ跡を
これに居るへといへはかれとて一つ所まくつりより太京
大身の鐙と横へて弥平次か太のかたに居けり弥平次
これとみて其後の跡は持ていは献来るはその後より
某とつまりりせて其方つ書とも色々との人跡とみる
たりわくたりしきてうち色をしとりきしなと某一
人え某ともせまして其方も来れるへ跡の持ゆ侍の化
跡に出待さるなりしその跡ひられとわりに太京之跡

名誉ある将と謳とハ引る所とて引れハそれまて
しそ僅に一両にあましし両に家老なりし名誉
の康光の秘子心許なしとて長刀を杖につき来りて
ふたりがうちよろ志く所を問ふ此所にて汝らと
吟てさてとは吟るなし若尾へさしとてめ合とのち
まても名高く盛しけりその家ちうちにある
るもなりれど両との指にはへなかりぬ憩しれて
陣中まてハ天狗の雑説といふ変あるものの物ともた
しらふ吟ゆ届ぎしんでハ進退せぬもののもと若尾かく
うまき若尾十八歳よりの高名とありて数戒
さぞのよりの感状三ッその外徒跣にして森太郎左衛門か
の感状もありされハ名てん無のなき高ありしひとく

後ハ作州と云りて福嶋備後守とつりて辺津紀伊守
浦家に召されて頭に病死す其のころハ伝に承合
会衛と名のる其子伝にまた善右衛門と改め紀伊の家にあり
善右衛門若きにわかき人にて此感状も他人へハ見せす
そりをのみこしみせさりしと承合、我ありしのみにしみみ
せけるが付子息善右衛門と改て又伝るよしいひけり

一 平塚因幡守関ヶ原にて討死の様子と人此語りし関ヶ原
の合戦みだれ敗軍におよびし時因幡守ハ馬を脈り
の身自害あるべき所ハ見へしに荒木伸納之衛小姓
横田小市郎と名のりかけ歩行にて馬との間州と一所
にてはたられなからも十文字の鑓にて一打二打うちてせられ

のを置れしハ小才次郎を引ぬき又清見とせしところ
司家やく馬より飛おりると梢ふおして小才次郎と
戦ひ終ふ小才次郎とつきふせ首とらんと叢(なか)ふ 首
せんとせしか志の恭とみゆる首うちとりぬ互ふこれら
略もへと大谷刑部少輔ハひつかうしろの司家なあお
ふつられて因れあせん深とりけて息をつき自害せんと せらる
主しふ山内對馬守殿れ侍柏井ちちる間とひしらを色 ありて
纔めて清く司家終をとかけつ訖もして御ヶ寶をせよと
いひて其の場をさりて打死ありし彼小才次郎つ記しらし鎌
とぬらぬんハ利をはぬきるへくそ

一 関ヶ原の戦ふ井伊兵部殿いかしきるき敵とはこふ
彼藩のうこあやしき鉄炮の音聞えるれハそれ使者

二ちとこなりとめして其の鉄炮の音ハ許かりし急ぎてみを
みる者しと佛ちまハ畏てはとて馬とはひせめち
うちて藩ふ下りける小藩けらと武者一騎のかけりる
ヶ二ちふゆきむひひも殿ハいまれ鉄炮の音ふつれて
麓の成候ゆえよの御沙汰かいはや其ろのすふつれて
井伊兵部ちの使之其の鉄炮の弟志めりけるもいうち
すでにあらりすこしも臆気をありまあらは汝ん為にし
めされ必よのるすとなや汝が不とよひへうり汝此旨
仰上られ必へとい福二ちふゆて甚右も使被ふと使之
ありし小平太ふとりる汝ふもとへられ必へと
い福再ニふとよひて其用捨ありしといりて ょしゃんしふ
二ちふも互ふ使なれハのんて様 明日らり

あしざまにおもふにいひ捨てうちわらひ嫌の体とみえ
けふにかれ役のいひしにかかりてすこしうろたへありて
むつかしき体ともしらぬ座てうちゆけるくらしく
これは中納言どの聞られらくはなそんで知りけれど
感じまいは慶長かまた仕りけるに其時もなしくなるまじきを
かれと役たらんとの給ひけるかしわらん事をさるべくと坂崎
出羽かうりして文氏と三左衛門は同じき時に二家へ申下されと
いひしものこそ大坂陣の時天王寺にして三宿勘兵
衛と一所に討死をとげし坂崎が又語れり
一 いつまで一の城をせめ聞えしや其時大将をかたりけると
先手の侍ども堀際までいかにとゝのひやとられけるを
指をさして果れとのたまひしに一人も付ざりし

得と其のひくにつきてゆく一人は剛の者にて鉄炮をもおそれぬ
ものといひ傳へられけるに後に次運は天にあるべきもの
とといひて弟子どものかたをあげて次にかけゆく二人
おかしく先をられ〳〵に大将の得と諸人見とどけ
て帰る初侍どものみなおもひゆきしうちに帰るとき
に侍をはるかと申すより弟子ども帰るとゆきしに侍ども
の内をなる先をかけりきぬとくくしくゆしくしくり
より後にそよく評定けり大将を感じし程にまひしと
ぞそのふたりの内一人は相葉左衛門といふ者の侍所以出羽
とといひしものなり
一 小西摂津守宇土の城に籠られしに加藤肥後守さる
子細ありてとりせ攻られし度あり清正仕寄場にて

てそ取城より取討なくちありてのあるみしめんとは
松は用心あること申しそなほ深く心られり取
ましれ比めて家臣みな人々見れ上戒ハくられれとも差戒ハ
小袖と云しうふ家中ふ名字とはこされぬそれ
名ハ長三郎といひし其名の足の上ふ蒲団とうちかけ
て在うりうり城中儀ふどもも事ありしふかかうう
之ひまうかりてなれハすハ敵よそありと我もと
さゝきしらうけありとて其ふうるのきの小そそ旗
袖小て深くにまぎれこゑハすする所をに長三郎蒲団なり
やり一番小なせありし敵ありんふハそをましかし一番読なり
と高名ふふものうかりりとてそ常ふ心かけゐ
りし武きハ真の武もしさもありぬ武勇んは自

其の答まそあるを武士の事ハ何の外ふ及ばぬ農工商ありこと
沙门なりむるそうのさそうしみみ心想あるよし上に
不幸なりんそのなりとうむさうたる長三郎ハつ孫まんとけ
おもしたれて其時の謹ハそ用られも一番旗ふあり
志をよし

一 備家ふ武家を蔵まうそ様ふ為しぬえとんみてお心志
ぬとのまつ之眉家の時蔵まうハ疵そも為りうしなり
それ時ふなるべうれども思ふまけ為の時ハそうふるを
その敵の為ふとつても何と定むもすいの心あるよ

一 かせ士ハ甲の立物よくわかりとて為をぬさかしもかかしく
よりおまそもするハあしくたまなりもうきりなし古人ハ
猛き但し武具ハ為ふより念とつまいめるさとありて

又どこあたりともしらず其故ハ月なみと見えても
人と尉めぬまじきや兵具などはつまりくなるあり
それしるしさきある文陣(ヂン)の其ハ名字名乗をもあり
射手かならしうしろへさきあみえうちし人のさえ
しれし人のさめ城ゆゑなきにわかれ文弓もあり
つかぬ附ころうけもしてとりもりいとしてみえる
とうしいふをおそいけるとも、ぬつかふ上手のありけり
弓をもすこしかれよき人是書するハこそしとりわり
おしえたてつけるおとこれも面白きかな
額あとをゆく見えて音をはるまもあるべし

一 岐阜の戦城攻めかけまけて城中へおしこむとき
津田夜三郎といふもの居ちうり門をうちくれてあけ

とりて書のものども門をあけなむと寄手の者入にやすく
き敵をつれて入まへといふ夜半にすてかくれこもりしに
口惜きこと敵をのりまけたりしと見くるしさゆゑ足
まで為常に討死せんと見定せよといひて馬を
おりて鑓をとり足柏子を踏てたちまわりさそひを
見るにあるまじきかくることと目家にうたすべき
にあらんいさせまじきとて門をひらきていれけり浅
小津田杉監といひしハこれなり

一 大閤秀吉公御陣の時有る日北の陣小屋を見廻り
すみに謡うたひ小鼓うちけるあり立よりて垣
の隙よりうかがひみれば内に武者三人あり一人ハ腰
足桂に腰かけて鼓をうち一人ハ扇をとりてうたふ

うちにいまつ人は虚とひえたりけりまめゝ甲冑と
常にきられとみえずして彼気色なしからんと
彼供の人いふらんとおもひしにさけなくてあれとみえ
よや退出ありや川まよふかなとて葉をふくませおし
てきれしあれなりけりしに酒をしてみさのみくらひ酔
なとせぬやうにとてとおもひて出をまはりしとそ

一 名護屋にて御陣のされし時陣備小屋なと見めくり
ましに小職月夜と額うちたる小屋ありさきにて御覧
しそこれは誰か小屋なるぞと尋させ給ひけれは明石掃部
にまかりありしか川尻色よろしくいふに数六 縮物(シクモノ)なとさ
なと仰られ家に白茶副て給りし

一 ある御陣の時秀吉御陣小屋と見えすとそのまゝ御ゆし
あき地にいりふとまくて菜のめぐみおさる所ありこれ
を御覧ありて其陣見みさるに退屈せねくめうなと
て白茶を被下けり

一 家康公ある時ふと廣間へ御出ありしにおりふし
番衆ゐて一人ふしてはなしあふとして居れ共是は恐
かねて御作ありて御機嫌よろしからずかれ一人ありし
人にてきこえていつも心つめてはひしが相撲兄弟出し
とや 御いかてか人並に出かさるしぞと仰ありて奥に
へらせ給ふ 御きけんへあまくなとて

一 吉田久左衛門鶏ともしめて陣屋に飼置たり 家康公
ある朝鶏の声を聞されこれは何ぞ吉田久左衛門鶏を
飼置しるは何ぞとてしまりしさせたまひしに久左衛門すて

ありける時と志すべきとの心つけきとしありしとて
御感あさからず然る此久左衛門ハ妙なる心かけありし人也
後ニ関白殿につかへその後ハ三河守殿へ参り大坂陣の
時ハ吉田修理と云しハ其時家康公吉田修理とそ
ふにそのぎもしろう孫のまで吉田久左衛門とそ申せし
かのめもいとやさし 其時それハ我とさしひ一ふし
関白殿へかへるものと仰られけり 修理ハ大坂の陣ニ
討死しけり

一 天正十二年四月九日長久手にて岩崎の城ハ丹羽
勘助守と云ふ小勢にてまもりし 然るを秀次ハ
始き戦ふに及ばず 首ハ十余級切りけり かゝるとき仰り
岡崎へむかひ 九日の早天に小幡の東なる高き所にて秀次の

勢兵粮をつかひ夜あけハ打立むとするに
所に此の趣を聞 榊原式部大輔 大須賀五郎左衛門
本多豊後守 丹羽勘助 水野之手勢にてうしろより関
を作り鉄炮を一度にうちかけその身ハ馬を入る程に
おしよするなれハ秀次おどろき さハがさるべき馬物具
ようといひしかきりなし 秀次の傅(ツケビト)にてありし男久左衛門姓某と
ゑてなれハさきにさんさんに戦かけ 一家共犬ね
さしん人ハあまた討しそへ敵ども味方ともに我先に
若殿下勘兵衛由日因有あまたそまりて討死す 秀
次も馬にもはなれてすでにあやうく見へけるとき
権への侍古見権右衛門とて乗てのせそ 葉内志と後にいひけれハ
犬山へそにげへまて八千余騎はたをうちはこさされしとの

一 皆赤裸にてかれ[illegible]見へけちりける吉田久太夫
ばかり馬から落ちるとすてぞ皆ゝ乞て楽田へ
帰りけりと三河記にみえたり
一 越後の城主たる督殿家中の諸士へ然あてゝハ百姓町人
共ハ作法にあしくとて越後の城下の町の辻に大札と
して城主たる殿の政の仕置の條くとて廿二三ヶ條書付けり
目付なる役人たちといふもの談合して夜ゝ殿へ人をまつりても
かゝるはつとりのとはきりと穿さくありてこらしめの
ためなれハ法度に背いせもの有るとして左る殿へ此札とつく
くと読て分るもちて謗と志て其法かれうかれしても
彼札を三度いたしきていふられしハ誰ありてか此成敗と
我にいふ人あらんやこれハ御天罰あらんへさせ給ふとそんじ候らへ

此札我家の寶なるとて結構なる袋にいれ収めて
納めけるのち諸事代官に打集めなどして善悪と
礼し家中の作法知行割扶持方の渡しやう町人
百姓にいたるまで憐愍を加へ仕置よろしく致され
そうらハそれよりして世の中人こぞりて名人たる督殿
一 甲冑を常にしてハ大きにかしこまらぬものゝ具足冑まとハ
いかにして身にかくなりて志びるしあらしと気のある
ときあらんものかわや
一 心にけあるものゝなれハ武士の作の名をもさとく人に
語らぬものくとそ我ものゝ家にしたるにこそあらんも
化るにかゝり又人にもとよる[illegible]きるありとや
一 織田内府家老岡田長つるどうちたりし時せう方[illegible]

と討ると仰付られ長門守とめさるゝ去つゝも御絵て
ようなるあうしみへて刀をとらしおうく広間の様ゝ
ようかへて床ふ志つらひて気より座ハゆうそふゆへしきをとて
いふつとき奥そまいれとこたへられハ其時去つゝ表
こふむかひてわすふ旅こハ志うし絵を集と両御敬おそく
よの旅金あうやう床ふ派より正しく絵付ハ其方ゆへて
あるへしそしきいてやとめさもふ処へ在世の如くに
疎されたり表の字て何とて在様のすあへむや
きりあうふ目絵く絵付ハそてと御絵のせられそハ不
在当句神ふかき頌ると伝ハ志られきも御付ハ
せられそハとこと位をか因ゆましらいと合釋して
いさあれへ疎通ふされ近へと奥へいさふいゆて常生へ

目見へあうしらハ表の絵うぬいの門ら志き鉄炮其外り
みられしとも其種子鳥銃を吹しるふ長門守御気
のとくめつうふしき御気わ御をみふ人し表二ふかれこ
あうや忽務あんせしむあうし時表ハ志とあいと
おもいふち当日ふ小振梠とぬき長つきとうしろう
ひつきて服梠とぬききて、ひき志めうり長門守も
小振梠とぬきも刀と双ときうけと人定うしあり由
小表これとひろくすうふきる表三郎すうしくわかあ
ひしとふきすくめられハ長つきる當ふやうにもとうゝはず
こし額ふ疵かつられるわどふ内腑も刀とぬきてて
あやしと仰られふ彦三郎何條かるとハ座きしく来
とたふあるてむされ近へとて志てすうしとゆるめし

内府長日そしてつきなふときに彦三郎ゑもんにて候へてそ
かくさしけるに彦三郎前後のはたらき詞つくし
難有ふしと世間かくれなきに後に古方河内
守といひし人や

一 渡部水庵常に語られしは我若年より戦場に
臨むときに先陣と心かけすといふことなかりし
といへとも其志のかなふことまれなり先陣する所を見たてる心かけの上
其時の仕合によるなりと語られき

一 播磨の三木を大閤様御攻候時我十七歳にて二年籠
城仕り一年ハ城にて居し其内二度合戦仕り奥
山佐渡守殿所存知也大閤様へ其後三木落城後

為御奉行三木より播州大閤様へ御目見へ仕候へハ渡瀬
小左衛門尉に仕候事

一 備中のすくも山を御攻候時宇喜多殿大閤様御家来にて御座候

一 阿波国へ関白様御大将として木津の城仕寄と仕取り
刈城中ヘ白昼仕寄と破り火を付のほりと候へ
とり候所諸人見て気遣する処を松を取り橋をわたる

一 長久手合戦の時ハ関白様御負に候而御旗本に而其時
首取り候三ツ候ハ関白様の方悉破軍にて合戦し
無勝候事

一 濱戸内記のおりに内府様東より御登り候而赤坂北上
岡山に御陣取り大垣ハ治部少ハ出申村越ア加右衛門
五六十ほど下りて討申候其時付而其棚際までして

迄付引取候人数を加へ赤坂の川中迄付てまゐり候と
見へ申候したゝき合候而浮田方蒲生備中内蔵助と
申者と付し候誰人数を集め推て参りとて
の儀ニ候得ハ何も見苦敷押廻してのま申候者騎とも
相方数書付之所用ニ付からにものゝ柄七度目迄候ハ
候事

一 内府様御横須賀江御越被成候ニ付而被仕置候て被登候節
候付而前廣ニ大須賀出羽守殿御存知ニ付而久世三四郎
坂部三十郎両人を以御前之儀被仰候ニ付仕
置候ニ付罷登り候て御前之由候ハ坂部両人ニ使
而出羽守殿所へ被遣候儀ニ仕候得共米津(?)右衛門尉
とハ而惣兵衛へ被仰上候所ニ而御座候処

不苦候由ニ御座候得共因幡守様
一 我等三河ニ被成御座候所御知行ニ而罷越候処
之御事ニ候得共因幡守様
一 紀伊国様御上洛之節御中ニ而御越ニ付而引返し候事ニ候
之御事ニ候得共因幡守様不被仕候事
一 前々大原主膳様御構被成候而右伊様ニ被成候
之申ものとて折紙ニ被遣候事
太之丞某付候而少も御意之通ニ候間之由候て只今
之の事ニ付而御知行被下候へ共御知行被下候儀ニ被
召寄御当年之御所務ニ被成候儀ニ候御座候而
ハ仕合ニ候得ハ彼方へ申上候へ共不仕候ニ付而
御頭証文を以申上候処ニ候得共先年御下知

大坂にて水野河内守殿へ被仕候 後ハ浪人にて仕舞
さよし候ふ御家中にて 二之丸めの御知行を給はる
御下屋敷に其後ハ浪人と成候て 伯老と云
病死仕候
寛永四年九月五日　楢林某

一 長久手合戦ニ付判様と申者ハ家康公の御旗本 小平松
金右衛門 大将七之丞殿 七之助ハ弓や 家康公御意に
之度の鎗ハ平松金右衛門にとて 此度とらせ候
七之助御弓につきてし上るハ 敵すみの場にて立て候
ハ之を給ふて首甚役をやり 矢と二筋をふし候
覚え鎗も同前に致しけるとや 家康公御思
案有て かくなと 御とり通りて その御褒美

とて ありのまゝに申上られける 矢二筋ふれしとや
大照体しとかり 其時前田又左衛門と云武功のひとり
しや

一 長久手合戦の判森猪股甚蔵の穿鑿ありし時
之度の一番鎗ハ山田八蔵 千田与右衛門と定る
其時あれすゝみ出て 一番やりハ八蔵 其次ニ某なり
と申つき八蔵ハ申しける 猪股られし前に何とぞ
かくれ急にして 志かと見えけれと申す 左右につき
られしかハ某鎗の石つきを 鎗のさきるやうに見え
が一番と二番と前後互にしきりに 左様にて武士の
道此頃ありとの沙汰なり

一 長久手の合戦ハ平松九十郎首をとりて 来る家康

一 さゆ威ありてはりけれとも甚兵衛ハ似合す追付の時ハ
鎌を持て草をかるふうしきにとり首ハたゞ一ッなら
ふずと作られしとや九ッにハ平松金次郎か首之

一 平松金次郎ハ秀吉公より知行三百石給らずとぞよび
かれたりしハ江戸をも見しを家康公きこしめされ成立腹
ましまして坂部作左衛門に仰つけられて追かけらる伏見
縄にみて追付より金次郎これをみて作左衛門と一刀に
斬殺しそのまゝあたりの寺へとりこもれるに坂部三十郎
出合ふうしろ知るもありしかむさの首に分捕
のるをとりおとしか金次郎又いふやう三十郎ハ作左衛
門と境ひなれハ気味あしゝとて傍の人々分捕
とはなのけり

一 美濃国ながゝ合戦に稲葉氏武者大将稲葉又左衛門と
織田殿内池田勝三郎信輝同紀伊守やりをしてつきあひと
すまれとてふたりなみて五十あいゆづりて首をは
とらす梁田捨六これを見てたゝかひて首をはあげ
さんざ首をあけずもみあの利ふかうずいそきとる
色しといふ家紋おもゆづりて遁とするをとらへしかハ
捨六さらハ其名を問ひて首をあげ信長公の御前
にまいりていふやうありのまゝに申上信長きこし
めされあれなる人ハその時さの者に同かくるものにて
をなしされとも此ほど家の大国をたまはるよし
てきく人々にてもほめられ利まことにかたしいしくも仕合
とて捨六ニ川を拾りしかり池田ハ身ひなんぎに

とよひしと云ふ土倉四郎兵衛と云相者ありと沙汰とり
よそ馬とひんがうして打ちふをゆるかりける 信長記
かゝんとしゝをこしたりし所にとわけしみや
一信長安土にて在の所ゟ荒木摂州より子細のありて
使者と参りけるとて摂津中と挨拶に荒木沙汰ありて
使を遣きけ候あしとて御使あちへ参りより菅谷九右衛門
并決して帰参いたしより使の子細ありて後信長信
けるハ御いハ荒木摂州とハつゝもの御内にて及ぶるをこれこそ
とてけ前なる今の尤おもし係と云つ之の出頭の者
られさし出きたるつ御使衆てむとてとれの服者ども
きてそうしそんにて出はとありて候さんとすけよし
とゆ沙汰してめつことゆふかひもの候とゆ続様なり

られけるてすゝめと沙汰ありてをしいたゞきて志りぞき
侍とも皆うちくれ御服どもと袖をとりのぞみ小姓衆
にもちて小姓衆にけとりて錦にかさねて参り出れハ
そのまゝ沙汰もしそ給りける沙汰三度いたゞきて退
出けるとなり 信長公異形の御使の沙汰のまいらせ
荒木常生しいか仕形古今めづらしき事なりと其比の
人ゝ申しあへりしとぞ

一伯耆の守護南條中務殿ハ代ゝ武边の家といひつ
たへ来り彼家の例にて毎年正月六日に具足の餅の祝ひ
ありけり伯耆の羽衣石城にありける南條甲冑を常に
てかけられ床に小腰をうけ大太刀おきて酒宴ありけるに
時南條つゝけさ酒に二三盃かたむけて打ちひさし其方

とおもひさしせよとて家老をさされける程に殺さるゝほどを
ましいつきなりしをとらへてのみ久しくとらけ
ての御物語し書付する児女の事よりも次にあるとの
ことも読かさね候を行者するに殺とのべてかたく
さとりあつかひして親子むすびあはれ此罪をゆるさせよとの
御とがめもなくしてしたしき夜ごとに給はんもろふ
と聞えんかくれなし御ふまさりてたゞ人とおもひて
ち罪をさしより侍る人なりとはいへども親の命
なれハなにをもて其子を引かけ二重かさねしに
南條殿元のぶへてよくさしよりのみかりさるかうては
かなふしとてその胸を足の上にさしける脇指を
一度引抜を副て引けり君臣父子の情実の道理

とおもふはかりける志のさしき風情ありとて精む人はな
かりしとや

一 家康は本多佐渡守とちかづけなひき石田治部少輔は
こまかなる事をたくみける所詮論議して志ある色を作
るに依て佐渡守事あつめてたゝかひのまねをもせらるゝにあやまり
あるものゝ志のほど見て天下ハおのつから家康へ入ずと
しきりにしも未来をかんがへあそばしひとつありとかせし

一 秀頼公誕生ありしかハ上中下万民まて悦て千秋万歳目
出度と祝しけるにある人さゝやきて関白殿ハ滅亡
の端ありとつふやきといひけるこのことじ又秀多のいひし
ことのふしぎし

一 関原陣の時ニ石田治部少輔一騎かけに伊吹山より大坂

一 平たせ木り増田右衛門尉ニ年寄し密ニ後見つきす
わりとて数寄になりて御出しけり初ハなにとそう
かくれなりけむせめて廿五六五歳内の浪人ともを
あつめ第二第三の合戦なりてハ力をひかりいかあらん
とぞいひける右衛門尉とのりとも志かるへきすなれとも
それハころよりさくこころに似たりとふかく心に思ひ
のむるをもちて天道にまかせむとそ志るみとのたまひ
治部少輔微笑していひけるハ太閤様のさつくはいに候
此刻まて我ためとおもひ候身百万石の給もふ十万石かハ
三度病氣中にいかかよのすとかくおもひよりしかとも
を大名にはなし遣るてありすんをはするみとおもひあり
とおほせられしに誠に目と見合せさせてとありうさき

候のみなにともかきてこそも存し志かれとも人にこと
此段ありつへくはれハかさうなふて是そ殊とハ中より笑し
其尊論しやうもすとおもひかりてかたき入りまして
わりかれとく申されしよりおそくの財百万石と傾し
さらはふみの不足にあるへきともかとしも我人数
まされいたしかね一口傷さ法事之とそのりとも
かゝる大名のまことをハ誰の学びへりかしたし
なふ人の語りともふり不審なるすなる
一 法師武者の首ととるしにてハそのしてハからぬ
なる甲ハりかふとはたとして戦其甲をとり副てる
かふハぬすもありふきし志てありけさんの力の振指らよう
副ぬかせとや波阜そか藤左馬助かのこの法師首

より時なけり批判ありしとぞ

一城攻舟戦の時太刀と鑓なりはさすこともならぬかなはみ
じかきもあしくとや

一手負て血の胴に入て難義ならん時は葦毛をとるに小
便を忍て吞べしありとや

一吉村又右衛門は人の云ける武勇の人なりと申しき中出へ
兵卞らひとせしける晩ごひとそ於中ふ来れり又ある
わかべきも声をかけるといひて酒飯て立しけるとも忘れず
うふ深ふいまも扱深ねさらはとて立出る刃にふい
れそとて立て命わしむ文ことやあふといひて
ふちりきんとまうしに吉村ふとり惜げなく其ことを
とりてもすこし送れなといひて二三町ばかりかさふいゆくふ

吉村いひけるは人の終らんとする時かならず一言ものいは
とのへといへり我老たりこれを生の暇乞なるべし
その後年わらしおかまへてつゝしみなき老ふともがらある
こりもと主人侍僕なしと其心得あるべきなすべし
貴人も賤きも人と知るといへる心得すべきことかなり
今はこれまでぞさらば極とて命わりをといひて立
わかれりぬ村の者老後までとりあけれはかなしく目に
あり耳にあることしつゝこれなりとも信次なみた
とは我もしにて異見とも聴いまほ気染随なる事なし
とのかきみくさり

一惣人男たちなるこれと人皆能いひしへことれもいとまごひ
の時某いひさうせしは其方いまぞまことに其て人へに

之用捨といふ事ハつ孫ニうはるゝへかれけしより附候ハ
まうつきるすくとつひき

一中西孫右衛門と吉田孫三ハむかしびなき友なりしが志摩嶽の
戦の時もうしあひ孫右衛門鑓付て孫三をつきふせて甲
とりわけすて小首をとらんとしけるを見れハ孫
悲之わかしやとをもひてたしらへけて消ハ吉田孫悲ニ
といふれハ孫悲ふよりかくいふハ中西孫右衛門と覚へなりかく
ろ附ニ臨ていとられさる名誉ニやとやく首をとらす仰候
さらんすあるへきとてとつて引給ひ鎧の塵うちはらハ不
思儀の仕合かなとて打笑てうちわかれしとそ此孫悲ハ表
吉の此方孫悲ハ宗因候の方ニありしそのゝち大和井伊
に候ニつかへ孫三ハ吉田之家ニ備候其家老となり吉田

與左衛門といひしハ此孫悲なりし也

一大坂冬の陣に伊賀の大将由右京亮候陣候へとみの
人く集りて天王寺表の陣場を請取るその時吉田大
膳候ハ病気ありしかハ家来原十左衛門名代として家来ニ
十左衛門陣場の割付地形険難をよく見て此の陣
割付ニて八十五間大膳ニ申上候へハ請取候事ニなり
かつく孫かうへハ閣に而仰付られ
どの所のかまへとかくといひしかと十左衛門も
憶せずいうに御ゆるしも
きうりしハすたしゆきつ
みなよる所ニ分部左京亮すみ出十左衛門ニむかひ其方ニ
ふどの身として大膳候の御かハりとして出すまてさ

おゝ系沙汰の限へといましめられける惣領家へひとり十
之清と正和ハ一途に己ることへと大なるにありて其
才をかられ御前をそなかりに見みなと上しきよし御感
とおほしめしをけられ位数のしるしあれ閣れて位付られ
けるに十六代当世の面目一代の名誉なるへしと程と
是して申されしハ大方のもの機嫌とふとしすかちち
閣度より御免れしと之十五代後には森内記殿のおにつけて

一 ある人の御ほうし鞠九損一徳とていへるをはいかにと
そこされども打まつたし心をしるる相しるす
いふ秀吉公より近江守六角殿へ御礼儀の時仰られ
けるハ六角殿は古風の家なれハ儀式正しかるべし
よそ礼節をわきまへて武士たるの誉ありてきうなる

きく人と三人撰出されて御用にさゝかりしかられて
の一人ハ古田肥後守殿二人ハこしかたに穏なる儀式
作法首尾よく存候して其のゆへ御感なしそのゝち六角
殿見きゝ御用の人々をとりしにあるまじさ儀しから
かしき事も仕かけられしと更に鍼なかりしある日
此殿は急ぎてのち吉川ゝなる日をかる鞠の奥にあるに
思しとてしよと渋ひ合なとして御座にあれども
れよりに殷に相延りしとらひしうさされども鞠
はおゝよぬしたちにいふしてすへて止まりけり
その時肥後守ゆかしと心にかゝる事ありて仕ざるにそのかうふ
返せ恭しくおさその仕形ハかりとも御目にかけ申上
といひてさとうちてあそはせらる梭がれの中より鞠

の鬢束をとらし衣紋ほころびたるにかゆみおこり
りしより鞠は上手之られたる人こ目をおどろかしけり此る
時よまで諸事小心をを名誉やと秀吉武しまふ
ことあるみ御褒美下されけるや

一 ある大名のもとにて大と小と人をつらね給ふに人々をつ
思ひへりし時人に法かりてとなりて終若へ被恨思ず

一 細川三斎の見え小脇差当座指料の刀と語ける事あり
しに藤白頂戴して腰にさし其後家につけ家代し
そのち彼刀と三斎のたりの様にあそらしを見さらせて
指かへの刀とともに来り拵をして刀を抜えて返りけり
若輩の者として奇特なる心ゆゑ上下みな感じあへり
しとぞ

一 吉田又左衛門語りし佃又左衛門は武道の心をもつて度々の功用
ありし侍也その指料に思ふ事のいへ人に申す理
あるまじとていひけるをもさしとめけるやわけせん
すみとふる色それとかくして候ひ居きるる之某氏
御手につきし時奥州にて敵の陣中へ乗込より
すゝみ大将みづから思ひて取かゝり陣をめぐり爺
といふものあらそひ附ける首取討ちに細川某殿
まきにさらしおき氏御の前にて再そせりあ
ひ諍に欺と追陽にもとり其日の批判に氏御のすゝみける
佃は常々のかけにより広くさきらけしけるゆゑ大切に
さりけるいろすうろたへけるとみえけり陣の稍をそへ
させてつきあひけりとありけれを帰りて陣に取討きさ

ひとく知りの鞘をつくしてみるもちけさぶらうと
わきまへかゝれ財をもて然に斎特に御返し
給けさせられけるなりとて氏御返ハ正直なる
ものなよのつゝめゝのなんとハそのやうりけ
すなしきそ殊の武士やと感じしるしをもて
其その時たのみて後の鞘を所さねるハあるし
それともしらぬ君の言とてそのはかりこそ心みば
常にその心内をわりしかじ変を随て加にあられし
とみえたり其は勝のるすくとぞ

一 ある人のいひし世の中の物とくるに大かたは刀脇差此
柄ハよごれたるしく足袋などハわろしきを用る人
ありすど物をたに外躰ある心ばへ

恥しきるすやと

一 ある人のいひしハ若にいつしざる物と久安さしなみのちねた
不思儀に用に立て名誉となるすを待りいかなる時にかあり
しに池坊に花を不重する人ありとなりぬすみか
かりけれハ薪の中より甚しきる木をとりて出し
花瓶に副て出しけり池の坊みてつゝ
作ぶんといひて其の木とわりしまゝに花瓶に入
ゐ紙の中より（三字かのまし）蔦葉を取り出したりしく
引きそひて立退ける一座の人々目を驚かし
堪ざりけりそのゝち池の坊いひけるハ二十年ばかり
かねともをさしなをしに時に当りて申さとを
ざりとよろこびしとぞある人是此物語とも

蔦葉カ
蔦紅葉カ

いろまじき書物と鼻紙の中に懐中し七珎んめ
御用にそへしは先偏に池ノ坊か心ともかなひしなどといひ
なり

一 ある人のいひしハ浪人と云ものにハ兵具ある人なく
なくひとへに志みしくさるかふんとすかいてあるさ
と又ある人のいふしそれも人によるべけさる浪人も
かさねの衣ぶくろそれハ肩身をもてあつかひ面目ハ
人と又問しおりさまなるんやハわたりの人とのつふ
おぶりいかなるものにやとあやしみおりひそ
の取れたてをまゐらかなるとあるやされどもさ
馬にのりいかにもあゆみさしつれそふとひとつれんへハ
おたりの人こそれとよんで日比の疑とも散しさてち

此人世にあふべきやかんとまかひかけぬふさけとと
うけるすきしまきこゝをわるゞにくくのこのひかたに
まみず

一 大坂夏陣表の戦破れて若江表へ難なかくにげ
ちりぬれハ若江のみとさゞき立てきこれしといへども
又に耳にも聞入ずその時波多野と云し人大音
とあげて国府口の合戦みたる揚すとなりて剣上忍み
よのと討捕まいらせるりと只今し来れるぞやと
なげきもふりけるに軍鑑にて眼とつけかへせい
と浮てふちまちに志川まりてけり兵庫頭誓明ほ
きりと神かへその首尾右無にしてそこみていきわ
よく戦死してけり

一　此頃肥後の国へ来りて某とかや浪人二人ありけり一人ハ
仙石角右衛門とかや其名さへ覚えず角右衛門ハ立
身の望なり一人ハ後生の用意らしく人なしとハいま
年老て世の中の望もなくすらすらと抜持るゝ心安く
一生を送りしとや此一人ハワつかの身ていふ物の用
ちらぬ悪きものなりと人ニ見えてもよも此二人みな家
老なりし彦林隼人ハちゑなみてさのこしハそのよしと
しせしに肥後屋伊右衛門ハ仙石か立身の望侍のわざな
れハめし抱へし年老たる人の手前殺度用にたらし
と称して志れぬものと志られども後生の望なく後世
一偏心とおもふて茶とのミ菊家と死ぬとさくおもふるハ
ちよのかの出入しけるもの之人ハ今死ぬるまでも望め

あることをされども世の中の望もたつきものハ少なくとき
てといふざるものなれとワつきもの人ニ見せしめの為ニ
少しへ見えず只一人ハ甚兵衛が中にも我甚兵衛ハ似合ねへ
沙汰の限なるぞ其理ハ用に立ぬ悪きものと浪人共
見えてそられハ少しへ殿としハ我家の罪なきハ用
立ぬものとも見えそうろうに似さるハ
当家ハワつかの者は甚兵衛を恨るゝあらぬ悪我ハ
我家中のワつかなきとしハあちこち用にたちべきものと
存之ハワつき財用にたちたるもの代老ぬるとも高知
とあく浪人をするハワつき財足ほどのうしめて武
道をさけ給ふゆへさるにもそれ甚兵衛なとは一己
と大事たちまちなれハ生しく前わくくききすへ

とありけれは隼人も無拠の道理なりとあらはれ言訳も絶
はてたり

一 浅井蝦夷と丹羽長門と安田長門と碁を合せるそのせん日
本金沢長門より碁合の時高山右近申けるは両
長門殿をは大将にてその上まさ人なれはとて
仕りかけられ明日は小松よりつけいりてかゝるをねらふさうらへは
当家にて誰か一番勝負すへきやなとゝも志りける所に
松平久左衛門障子越にきゝて明日の一番勝は某なるへきよしを
うけたまはりその時右近なをも特ならん事のかなとといひけり
案のことく明の日浅井蝦夷にて久左衛門まけさせとかく心誠
強服なれや棋の勝手つかりけて勝ちまして欺遅と
称けり久左衛門これを見てきのふの広言とも笑

てんはさ犯しされけれは永代の恥辱と定されき
なれの含釈もなくして当勝とうちことを松平久左衛門一
番勝と名をふりける此事世に語りつたへすこし
ちかきうちやうあはれなる人の詞もしるとおもひぬされ
広言もすへからすあさけりあることをおそるへし

一 昔江戸大番酒の時人の家来もいまさされ大名の
家の屋敷よりきりこにわりわりわる大名家より
おりしなる小屋かけ申しておもしけるに夜の比ほ
せきさ小蝿多くしてまとひかよひ十三四なる小姓に
蝿をうちせよと人ものいひすてゝ帰りたれはその程なる
小姓いひて彼小姓背をきつてうちたれは驚き
てたひへかりけり小姓にかゝる面目なきことなるか

はれたるのわか庵さしてたゞしく文未練なるものなと
思召されんとのおほせにもなきかれ佛神のゆるし
なし一度おもひしとをもひて懐をもたまゆける所に
去ろしくわりて文神のことくこととをうけてよしかと
うたれけるにかもさつるといとうちて存さうる御
うちしそれは熟談たひくとうちしそれはすこしとと
ろくすいかなる所存やあるとこゝろみしかは小姓に
とりしなとありのまゝ申されは主人かくし蔵しらひ
信長公も秀吉なとゝいふなこの武辺にはなかつらふの武辺なり
まされりとてそおほせられれはよそ胴とちの大脇指
そ時賜副て給ひしとそ

一 板倉伊賀殿詔を決断あるにまけさることも腹さらぬや

うふかゝる事にはまよひけれと奇特なるよしを心ある人は
讃えし

一 ある物志の侍に栖と云時一まりしに志内の御心
ともさるかふるまひしにけると

一 台徳院様より大猷院様御代を譲りはしめし時の御歌
そわかる人の語りしは

人多く人の中にも人はなし人となれ人人となせ人

奥山に心とめてこそ栖ハふかきもみちの色を見るまゝや

一 大猷院様の御歌なり
あるときそあるけれは中ふね世の中れなきかもあらは苑のうつ
明日は今日の昔と思ひなりて

うつりゆく世のありさまを見の前に明日は今日の昔なりけり

一 今川義元と戦の時簗田出羽守すゝめし一言をもて信長公
大利を得給ひ其賞として三千貫の地賜ふ又
毛利新助義元か首をとりしかとも出羽守か賞より恩
賞かろし此事信長記にのせし尤かくし実なるなと
こゝに記しぬ

一 夜討には道きく人得のよし第一案内者より案内
なきもなるへからず第二足場険難人得第三敵のつかれを
うかゝひ第四大雨風の時をつかひ第五鳴物役
第六とびまわる鼓をうち川無き役これあり第七立合
続するなり第八引はらひのよし第九引上の時分目
のよし引時も目付のよし第十あとより殉来の仁を
置引時それら役を仕門に立置ことなりとす

一 敵陣の方より馬かしらこなたへむかはかゝる敵と心得すへしうしろより
こなたへは引敵としるへし

一 大坂にて小職と遣小職より狼煙とあくる知略
の法や大職気をもちふすのし

一 ある人のいひしは我は此世にうまれてされはさることありに
男生や二母下戸にうまれきりといふて是一ツといへとも
志ありてそれてのち大名の子に生れぬかうれしきといふ
其故いふにとこしへもしてわかきれいらぬ心を
うつりけむ

一 筑紫にて関白秀吉小倉の名城をとりかゝりの御座城
をわたされ多城をひらきの御あつかひ利休と上京して
給侍ニ人わり比八四月十日餘城かこめまかりし

小間居の御茶湯之人ハ宗易へ寄りけれとも種類の茶
なし釜の上におきの事出ていかゝあと申しけるに紹鴎
ハいかなる御作意なるにやと尋ねける程に利休の
答られけるハ我等ハ障子ありのしと申さるゝと不思議
とおもひ障子をあけられけれハ月頼わたりて庭のうちに
おのづから移りけるまゝ心されとも只今の月見にとて
又まハ小釜の炭とて四畳半のかこひの欲に
おもしろく見つる事と存じれなとて名残の月を賞翫に
とおり浴に相応なれ本望ありけるといふなるらん申付
利休ほどの人もさても名誉不思議の御作意なりと
目出度感しあへり

一 昔の茶湯ハまことにあり今席とて見えもや食し

酒すき湯呑請らて膳とすなきより とかくに利にして
見やうは宗易とかく数寄の所には亭主もその心と志すこれ
利とて茶請とかく露地には出ず客も利とて茶会し
手水精洞して来りし宗易へ入ず亭主もその心
得て茶ともくろまず掛ものの花などに見んとするも定外
宗の礼みならず清わらず畢竟炉の出ぬ故にやと
ふとみて住よかぶきよき心もちな

一 出して茶の湯ハ世とのれ閑居隠士の分とれざなれど
不鮮見麁相ありてハいき後よきとめしよかうゑ来由にて
ととさへされてハ上田とりれ茶湯の会にきたる
者は心得くりの時分所ありなが大ぜいの鉄炮とも
かしふうちなりて 其と請待もしよく又為賀

右近の雲州御在国中茶湯の時ハかならしも
甲をぬかれしよや皆こゝろをとられけれバ思ふべし
茶の湯ハ心のなれハ花を見とし花を眺も
心ふかくすべし当流の理に志らるべからず
一 花ハ床に風呂前の茶湯にハ入れ候て
花見んものは床前風呂の後の席に茶を出へ移するさ
その時ハつゝみの衣服を着て床に出坐へ請志て簾を
捲上て茶を出し茶を心得申候てたちや出て
のち燈火をなくしつゝみのごとくせんを出しそれより
きよみがまへ衣服をあらたむ悉略す
一 織田宗二先花を生け茶桶の時ハ茶人の家のあるじ
の胴をも茶桶のかまへむかうしめてゆるしといへれ つ枝ち

さんかうの胴を錢おへむりにやうにすることれ利休の
語られしところとぞきこえたり
一 或ハ主人或ハ客人の御茶湯の時ハ中露地まで出つゝみ
せきにおいて客ハ主人に出むかひて中露地のくゞりを
開きて互に禮をなして入るに先客の時先後の當退あり
（くゞりをかくかしらにかゝるゆへあけてまたしむ）
まて先客より人まづ中くゞりの内すみに片付てぐんくり
の茶席に入るをうけ内露地の外をくゞりてそれよりあるひ
きせられることあり出し客にて内露地のふところ戸を
ときに茶席ふかくうけさしてせきとうどはきあとを
のぞりこまへの世話をなかりしとなして露地へ出るく
その後くぐりへ入る人みな用しその時ハ主人の胸よ
のかゝりしる茶席の上とせきぶときなうし鍵をしきこと

礼ふりといへり
一 雲州の大守松平出羽守殿と家老朝日丹波請待せられ
し時燈のうきの棚の茶具にて薄茶茶碗とおきかへ
合せり濃茶にてのちかの茶碗にて進上せられたり
丹波は利休の弟子なりとぞ
一 貴人の御茶よりて小茶入にて時たゞき入ましまさはたゞ小
茶碗とうくるちらたのまと副て出したる人ありさは
たりのまゝ小茶碗とうくるち太子と副てとし物なれ
せられたる時き人の申しけるおかしくおほえ候とて申き
つゝあるへき休の時のことと
一 大猷院様佐久間将監にとらせたまひて進の茶の湯にて

れけるぞとありしに将監承りてなにとありて多賀
左近んにかけ申さんのらへしとられけり将監て左近と
めし出されて花をのそもとせよと左近立上り候て縁中
すしやとかうかへ候て仰申されそれは縁まりたとる所へ有
御おもて常夜の床とみすこむ花生森に足打に
急しのたるゝと花切小刀とお副てとられぬりた左近たち
よりてもつ花一枝とおて花入に入れ又花と一枝おて
小刀にてきれたもしきれさうのありさまと御覧
ありて将監の膝をつかせられ知せたまふ左近の面目し
くるとえしと帰られし時左近持ちる小刀をとり入れ
むまみてきりてありしかくふきれざりしもきとなるあり
なりたどろきてとりるとしなともありなりしかしに

とかくてのきこえはすなはちかゝりがたきひとへに無智なる人
またハ諸道ともに名ある人の前にて稽古しならへるとなれ
ようらは癈忘しても仕そこなひしとて又あしかれは急用て
興あることともあるへきなかなかのさりある人ハ人中
にてなりすることを是色あるへきをはしほとさる盛
一　数寄大道になることゝ人と請して茶湯興行あるへき頃おひ
ましかはる大名達をつくさせて無人の茶會つかまつり
のそミ思ふとなれハ人をも同しくさそはんとのたまひけり
人こゝもえらすといひて大道の許色かくといひつかはし
てつれたちてゆく大道をなかにおしといひてかはし
大名にうちもたいたるの作法あそひ給ひなし

き仕合さりなかりし主の儀三人の人々まさりてそれと
みゆるをもかゝりなかりしわさより仰せられ候しに
終りはおもふにや後日にあひたかて作法とハ仕へきと
ありけれとの時容易者後の首退去さにおもひしりと
亭主のしてにおとしめてありけるとれ時よりの由を
あらさるへき評判ありしとそ
一　ある人茶湯にまゐ人のあいしらひとのいふハさのみにもなし
といひけるにいやしきをあつかふ礼の外なるへしとかく
その上茶入の袋といふものは是そゆゑあるを
れなかやまう人と請しる時ハその前にて茶入の袋を
その封ときるもあることといひけり
一　城をかこむ時仕寄場とていふあらんとて大ねのすゝみ

一
おさなきを追習の業練ける侍ハわかく老武者ニむかし
すこしもたかハしとも又むかしあつて以ん師出合
あるハ思ふ城をかこむ時の事とは城中なるもの さまさま
ほとりて大形のものにハ目をかけぬものも後にハ人に
持はくとらけとり人氣をぬきしていさみかゝのる
そしも目をとめぬ事をくさるものなる事ゆゑ人ハ新
みえぬ事ハ鉄炮とうちちをいあつものそのときも
年ほに仕舞の外ハ出ぬものなるも引も時ふなるとハ
皆かくふん何のことにかあり

一
城をかこむ時分一手火のさんこの外それの後とハ
よく定めたるよし山上ハ木あり木あれハ水ありと
云とて是則水生木の理なるへし

一
城の本丸ハ人質の預と入をく處きよなるかで

一
物数兵甲の立そのうつくしき事ものとうハ
其備黒くみゆる是を勝色とらし又まけ色
甲冑白くみゆるは其備白くみゆる是を負色とい
へりといふ物ニあらさる人の心いふし也

一
主君の心数あて侍業の心持する處にあるへきもと
てある人のいひしハ大和大納言殿政しくもの法師出
次第ニ附々者ハ弥にとて遅かりしと仰られハ此善情様
又物に氣かゝりて中苦法師の身をもてつくるへきか
さて城石垣いかりと出来してあるへの侍も精と出しける みや
とありけれハいつまてとても精を出しぬれも此善
請のそうゆきぬる体ても又色々と申上さるそあらん

雑こもたとへおもしろくはなけれとその中にすこしはよ
精進しぬるみえしものハなにそやありのまゝは
せしとなかせたまひ附に師のこしく雑こことゝもいふ
あつかえ山中月もぬきおて法人をも知しとびはつ
おはとりなにみえける男山ひしとなふものとて給は
ひしかるのうちにその名と名字もたちまちあはれ
いとやされハ雑なりん思ひおせと師ありけりその時彼
法師はじめらる業して名字ハ魚の名をてめさるは
はるかにはされはとゝもしられも鈴木か益田か魚からはとく
作らるゝやされすてはいはゞとてもたち鯰江かと師
かる時にきれ鯰江そと山ひしとも申されしハすみやかに系
也とて出して あの鯰江勘太夫ハ恒成用人く

一 と喝よく其後加増給はりけり
大閤秀吉公の童坊何阿弥とかや いひしハ面白きこと此なる
ものにて つね／＼に伺候しけるがなにかものなるがいつ
志けりけむある時に御前にてむき候氣色の外
見て杖とりて追まはしたまふにかの童坊よけ
なからあちこちえにげまはらせ給ひたまへよし
上様も私も あまりのちからハなし たゞ一日の違ひ時ハこ
川あるハ志れぬ世の中にかはりなされとせられ
と向仰せられとりて天下様なれバいかやうにも
なされるべき御事にてなされよとうちふせられ候に
みて面白がらしけふつぶやきられハその手の杖をなげて
ちれうちわらはせ給ひておや／＼めりよしと申されけりゆ

うけたまはりしその後にて萬事に入りしとぞ
世の中ハかやうの事かなしミもなきものハすきもあらざらんハ志られ
ことに感じ侍りける時の人皆羨みなどしけるとぞ

一 浪人の事ハ大焼きらいなれども世の大焼に逢
たるぬハすげなきものとていかにも火をとりて
おのおのよりそひて居られけり定め此方来れやはり火焼ハ
ある人と語られけるに老人といへる武功ある人とのべしや
まことにちかつき人すくなかりけりそれは御法度を志らず
とて、ときこえけりとおもはれハ是も心ある大小おもひ捨てや
又西方山の御法度せられしと武多き時ハ是を無大焼と
おもはれしとや又ある時ハあつかひしらハする人もまれなる
なり

一 同人風俗の事に湯がへひとり常にまゐりかけおき
風俗ともに時ハ男武士の前にてかきて垢とり二三人
ときこえけるその所へ来ける風俗の仕にて志るし見えて
他の下人一人ともあり居へ入しすでに往来せる浪人
其の所と入かゝりて隣りに風俗をとりてありしやに入る
人なりけれバ後の日のたのみ来たりけりまさて見えざり
きとそむけるしもなく　又一色もとりもあらん
ともふすも我心にまかせて居りかへし
めんとや

一 同人の許へ不時往来の人語る事ある時来たりハさて
まりて其日合の飯をすゝむ別に其役人定りて其
の佐草履ぬぎて飯くひを時かと見えさりハ夜も寝

おて少傳の人は仮に和由申すと披露せられき
なりと心得て為證さしとぞ

一 国人の詞義にたちの口を以て憂き称つるにさるものを見えけり
容来りて一礼す其詞定りて後に膳にて出來せ
口をとらち来り亦膳物これはときことそとつらつるの
こしけあるとも見て大きくされは次の男も見えけり
小人能わりハせしがためとぞ

一 日人喜ぶにつけて其心とて其中に病に伏なり
そありとし口をわすれりに養ひ寿なりしとえらちせて
いかにや、すきてのやうなれも大りとみては有り如何
盛きるやう也まことに蔬菜をつるに為らん四日
五日ト一度ハさるに一二種を料理させつるに来れ浪人

あとにとりこされにし其生のさるにとある一犯事とぞ

一 昔上京急より火出菜院菊亭殿を焼てすでに
内裏もあやうく見えし時に八条の宮衣冠正しくて立
出で給ひて清涼殿に参りまして大男近くみえ
ふりとし内裏につつりゐんにて弓射とも護し
まつるを怪幸を御不思まならんと思さるにや誰かある
けふし奏し申さしめ給へと宣ふにのたまひけれハ家中の男

肝

女實にありしきもののもがなと一度に感をうけ見れはし
こかしこ捜出し見るにそ其詞ハ其家の大男ハ為り汗
ふとなりし詞と消しまげなるめき内裏へうけ入宮のゐあり
き角とりてそ詞を謝しまげもとりかへれ程し御見なりし
もいさむかしかるし人の善悪ハかゝる時にこそ明なりと

一 織田常真公の物語しけるとや

一 大坂冬の陣の時寄手西南北東大きに掛けるに城中より大小の鉄炮つるべをうつ事おびたゞしかりけり寄手流石の寄手も大にさわぎあへり去ほどに古田大膳殿の家中に名誉をうけて此ハ用にたち人と申し兆武者鉄炮の音におどろきて大将に備へ参りて各覚悟をきはめけるおりに物音も聞えぬ若者をとをすあや敷とて出れ馬より物かよとの声ありけるめき上とひへと見ありける不ぶ先手の組頭ありける森三左衛門原十左衛門二人を世来りこハなにごとぞとさわぐそうろう入しけるをたて大将ともたとかうしまいすぞ此体の限くとの鉄炮ハ狭間くずりといひて志ろ攻時の大法や此よし大将へ申されよとて置もんの家をうれ志つまりはいそしといひすてて面々の持口へ帰りけり此森ハ戦場においては度々の高名ありし中にも三木の城を攻られし時大閤その時ハ羽柴筑前守殿とて付城をおきれしに別所が方より押出し不意に洪く三左衛門走り出つゝ打入させ（はのまゝ）合はせ追払その名まわりはなかりしかは筑前守殿めされ陣羽織をまづかり給ひし之原十左衛門ハ稲葉が一鉄手につき時の首捕又ハ天王寺にて度々比類なき働ありのちには森内記殿につかへしとや

一 大閤様は天下の法度をよくきうせられし之其證多し金森法印山中山城守なとも其首尾わるしとある人語りし

一 今森法印は陣立てにハ白き吹貫五十本とそろへられたり
けり此吹貫大閤事のほかに御らんありと法印同心ならし
心得よき法印なりと見る程しき心さしなれハ後てのちに
へきすることにおもふ時さるぞとそ茜の吹貫を用ひもちひしが
のちも猶さけるを御わかされたりけり世人これを感せさと
なり大坂の御陣に今森殿の陣に白き吹貫五十本そそ
ならへられしを白雲の風になびくかことくみえたる
さかぎりなしいさゝへ素吾のそこ御らんれしハ殊勝なる
きれたりなと云ふ人々いひあへり
一 古田織部殿茶湯宗匠の比氣きへし大工善右衛門と
いふものあり甚此茶湯をこのミて人々ハ織部崇敬の餘り
善右衛門念比なりある人ハ自出羽守殿と上きやくゆて
お侍衆二三人のうちに彼大工善右衛門とかへられける甚翔ふの 加
そみて出羽殿へ来ありしに善右衛門露地に出むかいたるに
此お侍は早くより気つかしいなれハ出羽守殿気色かはり
りまりし茶の湯の座合遠ふうとそらぬ人をかれを
お侍の気分をもそちて異なるもなかりし甚此さする
きぬくに批判ありけり
一 織田(部ノ誤ヵ)との茶湯さかりなりし時ハ遠国よりと仰く人へ申しり
道菊して織部とのゝ道とそらひ茶湯尓申をとく
織部殿のより氣に合する塗師の道恵といふ者都に
住みけるか織部殿の餘勢によりて茶湯を家業も
となりて織部の人にめでて誉るほしかれハ其身も
仕合よく自慢して侍なりける北田舎に住し士

四五人うち誘れ休之とともなひて道恵か家の前をとほり
通りけれハ案内を通しけるハ我か休之ハともなひしものゝ
御めくみもとめんと出入侍れハ其方てつからして承及ふなかる
おかしき事となる事也と茶を所望仕るといひけれハ
道恵悦ひ折ふし釜の湯も沸きたりしかハともなひ入て
やかて露地の戸を開き淺茅生うちに挨拶して
茶請に小煎海鼠串鮑蒲鉾の煮染なとを出し茶をたて仕廻
時宜とゝのへて各まかるとすれハ道恵侘言に慇懃また
くこんの中に田舎ものは雑にハあるの茶湯にて濃茶ハ好
侘茶にして居られたし飾付の数と覚えて気味なかりし
道恵か茶湯奥ゆかしかりしといひしかハ此人これに因せり
かゝる茶湯を限りし時より人みなかくしてそ道恵かある

一
渡り来る人孫左衛門にて雲州にありし時侍衆の中に
よしみありて等閑なく思ふ人ありけるの人器量音信もよくて
武勇の誉とありけれハ嗜誠ふかく各番甚しかりしハ
他人の妬をなしひて来て言えを加へられしも更に其門
許し給ひ此様をの様をとりたるに不通のものありて
彼人知音のさかひに切腹す段りとしける妻子となりし
人とあつまりあとさきをもしらすにあらてとりはしかりしを
さるの金銀ありけれとも一族のものともに扶恵に配分す
孫左衛門ハ金子弐百両ハかりの配分なりけるの時孫
左衛門いひけるハ誰も金ハおしきものなり勿論之我今これを
とらんと吝欲さかりし今この様子の時我身に宛えんとして
飛めくなりけれハ又我ハ少知れもや今この様いちるい

南軒

ところすものとあるへきことをえうくしたゞひてとかくせむへと
ていふおとゝ之とも取りきずかくいさめしまきところさし賢人
君子ともいひけりしさるにこそ皆人感しあへりしと
ある人すゝめしかれ我にやしなひ道に志してよりかゝる
事とこひ給ふにこたへされハ南軒張子の言にハ義利の分ハ
より先なるハなしといひもとに一つとたゞすなはりて
これとなるときハ皆人欲の私にして天理のなすにあ
らすともいふなれハことさとあるべし愚なると棄ふる
その心とこりて
我にあたるすは我名にもあたらすへ人のさあしき身のまもるとたまれ
とおりてこそ語りき又日人の欲は
世の中にすむかひあらハあかれもなのうきこときと人にかくて

これ恕のきといへるなるべし

一 信長公その氏を揃へしと小性とりあつめけるうちに
さる稀なる物なれハ何とよむぞと問給ふに
御氏のひとつさしきるよしを申せしに御袖をそばせ給ひ
されハ氏ひとつ川蔭より信長公御感ありて物とらせ給ふかく
こそ念と入るきすなれとて御褒美ありけり

一 池田少入閑斎燈裏にてみつからの栗を焼てくひたまふにそれ
ある十歳ばかりなる子息側に居けるにたまひしと具
心を試んとやとてそれけし栗をとりけるをあなかち
ひとつくえしハ火箸にて火の中なる焼栗をとり
おとしのけさしおきければいたくかけしたりけるよした
られてをしいさきなかげもなきさ物にてきこえし

一　なり此人家長のうち池田こなたにありしときこゑかし
加藤の家の肥前守殿河和隼人といふものをめしかゝへられし
の時長裃につきけるさむらひしともがら此事聞きかれど
ねがはくは隼人にいかりある事ありてこそとおもふはいかるあ
やまち又とあるまじ後のためなれは罪せらるゝものとせむ
聞えしも一人切腹せしめよとし仰出されけるその時隼人
召出て申せしかども赦免ありけり此隼人初は河和
善右衛門といひて秀次公につかへしのち堀尾家にありし
ものなり

一　武功ありし人のいひしは具足の上といふは綿くるみをよしとす
また具足帷子ハ草摺よりすこし長きをよしとす

一　池田こなた殿の家老伊木清兵衛病にふしてすでに末期に
臨しに我今生の思ひ出にや今一度君の御目にかゝりたきこと
ありけれハこなた殿きこしめし輝政いそぎかの家に入らせ
枕にちかつき手をとりて清兵衛心はいかにとあるをかたじけな
くも志づまりしこそ殊なれとて涙をなかして悦び
居しその手に志たゝめ奉りて跡のお遺あるまじ
きことハいふにおよはす　いと神妙に仰られけり　其
時清兵衛涙をながし　あらたに合こらへも入御ありがたく
く冥加至極せり　然ども此度ハ愚息か覚悟ひとつ候わ
らいで　とにもかくにも清兵衛に申上げなれハいまさらも
んにかゝることはいはずとして一つ申上る事とハいづれを申さず
若ても家ハなりたらんこと妾我をはかられハ得心よ
そむく公つまはしに候ことに罷り出るとこのまませぬに候病あり

中にも士のかり出しとまりしかりとよりしが病あり
士ハ多の限よりハ一條よりしあてかきも滞ひて
こそ長く出家と不去忠節となず他しともしがたし
三たび爲涙しと聞かし只今の情な道理を極せり
其志山よりも高く海よりも深し生前にとかて忘
却すべからんこころやすくとおもへとて清兵衛がもとより
なみだと流しなから憐しみけれはけり君
臣の情あられなりしありさまこそのちまで語り伝へ
よしなかりしとぞ

一 風炉の茶湯ハ中水をさすといふことハ利休不時の茶湯
に茶をと乞し時茶碗へ茶をいれて入るるまま水をさしあ
とをふくと汲て釜へ入るしより中水をさすといふこと

始の相もなく云ひ出しにある人南坊不審ニ思ひ利休
に問ければされもよきの弟子ありて其の釜の湯なかり
しかハ湯をあつからんために水をさしけるや定て中
水をさすといふ事をは志のほどなりと答へたり
きたなくこそ問ひけれといひてよろこびしとなり
といひける人ハ高山右近宗因望物なりし

一 童子ハ抱関撃柝の道、此夜柝不撃木也撃柝のこと
雪ハ四三二之夜半よりハ六之明るは五之不急の時ハ四三
六二と撃つやたしかにていひあるものの時不急の時ハ五また
心みかり急しと時にのそそきたもず

一 ある人のいひしハ戦にのぞみて敵にあつかいになりし其
人質ととりかはしあり其時ハ人質の取様れるること

にも見えず口授あるべし

一 首帳を付る時一番首と二番首とを見て のち
一番首と付る二番首とハ付ず 三番めよりハ 高付
あるべからず首をとりし人の名の下に尉の字をかく
無き首の名には尉の字加へられたれ故実や

一 大坂冬の陣の時堀井手負て首帳に付られ松浦
弥左衛門一番首取りしと帳面押加へて帳付人にかゝりて
て出なりて松浦かれ又やく出付られたるに帳付誤あり
けるより御穿鑿ありし出付此事とひろまりける也堀田図書
跡役より済候て首取りて来りたれハ一番くび疑なし
松浦は馬乗り某は歩行や故帳前の遅速なりと
いひたれハ帳付人も尤なりとて二人なから一ばん首と

しるしけりとぞ首帳ハ二番首まで同じハつけぬものなり
と古説あるとかや

一 ある人の母衣串とこしらへさしかけこれに念をつくしたるを
に念を入まじきと見えて古老のいひしハさて大形は恰好よろしく
はさみ金をへ屋根にあしく候かゝる者のハいやしきものそれに
損しさるとみへくるしからぬものなり凡武具ハ念をへるものの
きざるとその道具ハおのるへきもまし

一 ある人戦場にて鑓の目針のぬけてなかりしと十文字
なる鎗の武者を見つけてかゝるといひしハ鑓のえにすてかゝる
時にさても奇特と見付のひけり誰の子息そや名ハなに
とやらんとたづねさって虎落竹を切り目針にせしと
よき仕かたと人ほめありけるとのちに批判ありしとなり

不例なきことや

一 ある時大猷院様御新殿の席に出坐に雷の落ける
席に候ける衆はかゝることにて天地の崩るとも思ひしに御実
なるそやとはかりに御覧して久内御家に立さはきけり
雷の落ることは大かたの事なることにあらすさわくへしともあらすれと
御当地楼上品ふつきりゆく腹に落ち上より達せる蛇
その時はむしろ人の家居をそれほとしてさかしにゆかれけに雷
とられるも無き人まれなるものの他家驚嘆之つさひて
程は清水下二三里四方家々新をなさへされは雷のとつにるふ
家やかれ人様其とはすかまおとしくるそえけりかつて
かきそこ聞候するものとも尾羽をつけて語り伝へ由
なるみ所あれは何ともあるへきなると仰ありて御気色よかり
し

よや附に役てようしかされとも皆人いひあへり佐久間氏僧
篤師なりしよき人といひ沙汰せられし

一 加賀古肥前守殿上坂又左衛門といふ武功の者をかゝへら
れて知行五千石遣る人あつけられたり又左衛門いふなる
引む足軽率人さしよせきよし差寄所にとらへともゆるし
給ふまても又左衛門もせんかたなくてわひしつある所にて堂し
て生死知る者なりし浪人とたちつきも左夜心底とと志へも
承ぬかして参りれとも其ら披露ふれと内談ありしも某ヶ知行
あらたなる者ならあふなる兼に足軽五十人あつかへあつけと申し
自然のことあらんと思ひてかねもてさせて戦場のすをつとめ
よきとせすといふとひかれは其絶も及はれこそなる
終るりけり又左衛門無能の仕業之と沙汰しけり 上下

みなしは此人なり有るべきや

一 武功ある人に軍法のことを問ければ我も志はあれとも生附の
氣に依て猛勇はあらず唯一其君相のところにありと
信合稱して士卒の志一致ならんには猛を疑ぞし
又臣下の志はいかにもとこそ人なきとともに心ならず捨るべく
東西ともさそめても我身ひとりの一大事とおもひさず
めて進退すべきといひける

一 ある人いひけるは信長公の明知にあさむかれ給ひしは
そのかみは此度は心さみしくして知識にまかせし故に讒説を起り
又其人の悪行を觀面としけるをとがめしなりける
附家康は信長のみへとがめし附物深く忠なる夜けり
家康はまつ家へ對し禮を讓せ厚くしけるを信ずる

ゑまひていやしめれ深志は其後にあらざらむ歴さるのに
わらひえ秀深志ハよろこびある身の家をしりと云好なる
て大家になりける志かりし禰の恨をふくみ恩を忘却し
さるまゝ謀叉悪逆を企てこぬとおもほしめけれハ天道
そむきしゆゑ職に利としたる流浪の身とな
りて家をとゝのへ御身に帰れとさしふところのゆる
されね男あそはしやとおもかしのなかこらへハ松永面目と
うしなひ身をあやまちてありける恨をわすれしてなる
義昭公へ謀叛をすゝめ信長ゝ敵となしけれど微運に
よりて皆ところけたしてあつかひし明知を信長公先帳
ありしといふこれはきところありけるとふかき
ものなりといひしし人ありしとて人ハ恨とらう

けぬさへありたきものぞかしといひけり

一 松永弾正松虫を飼けるに常に養ひしハ三度まで
いきかへりいかんや人目前の事なりしより長命なるん
ま疑ふ所といはれしとや

一 ある老人末老て身の上をいひぬすめ人といひしをある
人語るに一夜の宿も取所とりぬるハよのつねむかし松永弾
正が戦ひに負けて自害およびしとせしに百會に灸していひし
ハこれを見る人ごとにその身の為をもちやとさたせしかと
松永かれハ我常に中風をうれへぬ死なのうちみとも
たに中風発して不行心にもあるハ臆したりといはれ
なむさあれハ我そまでの武勇もむなしくなりぬへし
百會ハ中風の神灸なれハ常に其病をあさせてしたりとか

自害すべきとのさめやとて灸をすゑて腹切ましと
其名を惜む勇士ハかくこそあらまほしけれといひけり

一 長曽我部家人に古枚勘由とて武功の人あり此人戦に
誤り侍るハ大坂八尾にて藤堂との長曽我部殿と戦ひに於
合戦のときに某を似合の高名ありと志けるに後の合戦
みなうちまけて某も鑓を引退し時和泉守殿北の丹
衣頭に名村なにとかいひし武功のもの某を見かけ返して
勝負をせよとのゝしるされハ時にかなはずとのゝしるを
くるしといひて退くそのおりしも某か妹聟にてありし
伊尾木権之丞といひしもの勘兵衛殿我らに居合かへし返し
合せて勝負あれといひて鑓くみあはして二人ともに
引退きしその時なきんぶにてかたかひけむ又ハ切たるにや

ありける事のさまハ鼠なる形ハゆく旅人のありけるに
きしかりて揚屋すまと見えける旅人何此何某と
なやすせしかそれか名とけしまれけり語ふそとふそうたれ
けりなとも近くありしかとにくさけあいせられおまえ
しかと歌大勢見へけれハ退散せしといひけり堀伊織
といひし人これと居士にて母衣ありけし人なるか
ある時某ハ其日ハ是はいかなる浪人衣とをなるそや
といひしかとに古杖勘右衛門事といひて彼物語せ
と語られハ横をとふりてさそとそのまハ名ある人にと
語りて我に一番異とくハせてのきしものありしといひしか
待りさてその人とよふをハあるまいかとといふかとに
子えとも古杖とよひやりて名ある人と伊織と勘右衛門と

我も旧人にてかの時のさまと語りし笑ひありていふそう
ふふけむハ点ふ物語あひぬるものえといひて酒ふとのそ
てうけらけれとも見りの袖をそへ見るまもえ
さしくありける伊織子ともハ松平越前守殿に二人あり
いよそ志くいひ語られ

一 志げこハ陳をとる歌ハ磐と見えず又ハ衆ハ塔と見ゆるもありとあり

一 山と海とそとる戦にハ川をやく山ハのかりかくそとる
とうしなく

一 川と海と川ふ家ハ水枯ハ水かきわかんにハむさと人数
とこもへりハ

一 川をやく訓とる方ハ揚とりひかへハせなるす日備あり

一 百人と十騎ふとり備にハよきてす合えとえり

一 松村のなゆきふりよし川ハそのなえことの臣ぬるにハむつかしきものなり其の時ハ人数をすこしそへてにわとし目
志やうぎをかけてうち鳴の役おゝく数を川役てとよろしむるときよしとす

一 人数のすくなきに見て人数厚くみゆるハ勝となる事多くハ負となりや

一 むかふ風惣まで風よしとす

一 貝の響きなどハ天に高く聞こゆる時ハ負るといふ

一 地にひゞくハ勝となり大風の音やうなるハ負るといへり

一 石積足ハ誘る人に一万等

一 虎落竹百間につれ針三百本ばかり要作ととのえ

一 兵備あたと武道大将さくまりてあるべし又其の内に縫ると
さだめて其の次とさだめ置川心得あるべしときされど
其れ治乱につかりその次とたゞなされことに吟味ある遠し心得
るべき物語りことにある人志みつゝと語りしとかや

一 手を川の心持となるなるべし

一 陣やゆてんのもちのことある人語りしとおもひ出すまゝ
うせてこゝに志るす
まづ川東西南北をよく心得へておく
小屋をかくる沙汰
日足脱ときて忍せん時の沙汰と使かるべからず
盗人の用心すべし
清をくれどとのふる

わらじかけなど
草履とてもおなじ
朝夕の食のうち勿論なるべし
馬沓は目通りに
鐙と小沓の紐にかけるをさせかけてとくも結付ぬるもの也
鐙のうちをあつかふにふまず
鋤鍬もたせる事勿論也

一 城をせめしにさかもとまで寄あるや鐵炮の矢先に
かゝるをあやうし

一 足軽には寄せ来れ敵とうちあひしらひまつくれぬやうに
のことは心得しかといふ 後の人のうちに切先あるといふ

一 川中を馬にて鐙をおもち来れ敵はゆるしてむかふべし

一 秀吉公の御歌に
武者ことはよそにせで好むとおもひなば人にとられて恥の鼻あき

一 逆茂木とは或は門或は用心の構あるに大なる木を切
りて枝をきり そのまゝ根のかたを内にむけてたつる
なり互にむつかしき物也といひし人あり

一 惣て勝負の時人は氣昂する時もたゞ急なるに氣昂せ
ざれば足虚なり 眼に氣ある時は耳虚なり

一 大将と小将と戦ふ時は険を前にまへて其作形は一手
道狭り二手 大川之小山坂溪澤四ツ穴溝

一 武将の上の将大なるは國郡の多数きはまれるところあり
一国の将百人あて身して 拾万石の者を以てなるに騎馬
武百騎とかは一里二騎るはなるまじ

一西丸御殿の御普請有し時ハ佐久間将監奉行ありし御普請
大かた出来し比大猷院様御通りのせめに出御ありけり
将監御供の中にありいかなる事にや大久保彦左衛
居合られハ普請も見えと仰かされて織結構なる御普
請の次第にいひとりしれ　後に将監斗と見えて鴨居ハ甲ニ
仰て宛と有るとやかん其方ハ家のことに御殿をとし
ものの旬伝此御城なとしハいしらぬ事といいなるに
その作法ハすたしあるべきを此鴨居なとハ甲の立物又
ハ鑓なとをとうりあげやしまさなりかねばず又塑
隠なとそえいひしが召ひとりぶなそいりてハいそうとしき
ときハ具足着なからの刀脇指さし脇といかふらし
てとしまいる物之それしがある筈なるぞと用捨と

なくいひられハ上様なるほとか其御感されけりとなむそろ
くと奥へいらせられしとよし誰か聞侍しにや世の人語りしと
申傳えけり

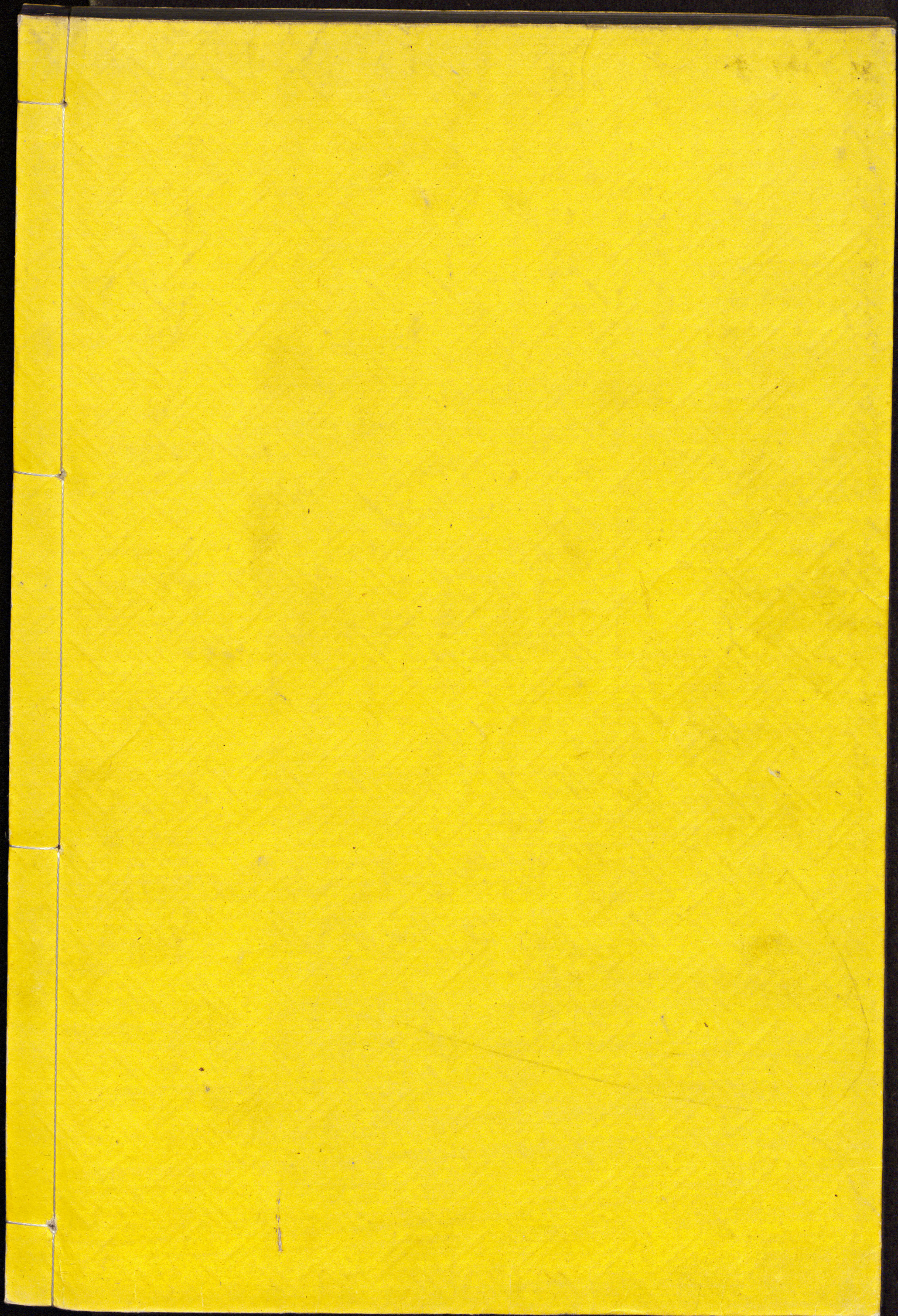
一又ある時大久保彦左衛門堀田加賀守殿ハ見とかとてゆき当
く古たれ此両殿ハかわしみとも武道の義或ハ三州までの人
此つきせき事の事を語から　加賀守殿その時彦左衛門出へ今を
昔しのとく合戦なとあらハ諸白むかしよりハ今
おとし心たもの人いくらもあるべしあまりにむかしと
いふもかえるまハあるまじかたなしとこそそれ出かうとあり
されハ彦左すこし気にあてられけるにや其左様にこそあらん
左られ却而むかしよりもその勤をなしはるけしとも
えてハさりなからふ今とても心つけ次第ならず

半殿の親父甚兵衛殿六十にあまられ此まで別に老人げ
なしけ給ハずいなごの首と云ふまれにもなりす
も無ようされハむかしても心よりけぬものハ十人並とぞおかし
かすれけしといひ申されけり　加賀殿筆色かゝり善尼
いたりしさをと申ても身のふとてなさのかれとありしと
ゆふある人て挨拶としてすきつるとし誰か子ともなく
此を流り侍へるけり善兵衛殿ハあとさき泥も知らくもの
四人知りとなれハさうともありしをや

一

一溪道三えいふに紹巴法橋のもとへ玄朔依今養米年
我等八十年餘り八れとしよ禄とうすすにかすかしとぎ
と書それにかゝう返し　紹巴
あふしき春にたおよく　たのみすも百にかそへむ君のよは

此物語もとハ二三冊ありしとさて一冊とうつし　ほかりとぞ
おもしろ人のあり志と寫得しふりいりなるいとの志ほし
かりけむととおもしぞよき事とも多く　みゆるふ
みや　うつしてみん事のなきすや




H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002